

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520346

研究課題名（和文） 有島武郎と外国文学—韓国近代文学を手掛かりとして

研究課題名（英文） Arishima Takeo and Foreign Literature
—Korean modern literature as a Guide—

研究代表者：丁 貴連（チョン キリョン）

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：80312859

研究成果の概要（和文）：本研究では、夏目漱石や島崎藤村、国木田独歩、有島武郎など韓国近代文学の成立に深く関わった日本近代文学者の中でも、とりわけ有島武郎と国木田独歩に注目し、廉想渉や金東仁、田榮澤といった韓国の近代文学者が有島武郎と国木田独歩の何を、そしてそれをどのように受容したのかを解明することによって、韓国近代文学に及ぼした日本近代文学の影響が国木田独歩から有島武郎へ受けつがれていった事実を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this investigation I focused on two Japanese modern literary persons, Arishima Takeo and Kunikida Doppo who are related with the Establishment of the Korean modern literature like Natsume Soseki, Shimazaki Toson. I elucidated what and how were the Korean modern literary persons, like Yeom Sang-Seop, Kim Dong-in, and Jeon Yeong-Taek, affected by Arishima Takeo and Kunikida Doppo. And I clarified a fact that the influence to Korean modern literature from the Japanese modern literature was inherited Arishima Takeo by Kunikida Doppo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,100	630,000	2,730,000

研究分野：各国文学・文学論

科研費の分科・細目：比較文学

キーワード：有島武郎・国木田独歩・李光洙・金東仁・廉想渉・田榮澤・近代文学の成立

1. 研究開始当初の背景

韓国の近代文学史を一瞥すると、開化期に書かれた小説のほとんどが末広鉄腸や尾崎紅葉、徳富蘆花、渡邊霞亭らの翻案であるば

かりでなく、韓国近代文学の基礎を作った李光洙や金東仁、田榮澤、朱耀翰、廉想渉らがいずれも日本への留学経験者であるという文学史的事実が浮かび上がってくる。これは、

もっぱら西洋を見つめ、西洋近代文学の一方的な受信者と考えられてきた日本近代文学が、韓国近代文学の「起源」に深く関わっていたという事実を意味しているが、中でも国木田独歩と有島武郎は韓国近代文学を語るに当たって、決して看過できない存在である。なぜなら、韓国近代文学の基礎を作ったと評される人たち、例えば韓国近代文学の祖と言われる李光洙、短編小説の開拓者と知られる金東仁、リアリズム文学の完成者と目される廉想渉がいずれも国木田独歩と有島武郎を読んでいるだけではなく、その影響を強く受けているからである。以下に影響を受けた作家と作品を示すと、次の通りである。

一、国木田独歩

「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」
「少年の悲哀」と李光洙「少年の悲哀」
「帰去来」と廉想渉「万歳前」
「運命論者」と金東仁「ペタラギ」
「女難」と金東仁「ペタラギ」
「春の鳥」と田榮澤「白痴か天才か」
「竹の木戸」と田榮澤「ファスブン」
「号外」と金史良「留置場で会った男」
「運命論者」と兪鎮午「馬車」

二、有島武郎

「宣言」と田榮澤「運命」
「宣言」と「金東仁「心の薄き者よ」
「小さき者へ」と金東仁「我が子へ」
「カインの末裔」と金東仁「赤い山」
「生まれ出づる悩み」と廉想渉「暗夜」
「石にひしがれた雑草」と廉想渉「除夜」
「或る女」と李光洙「再生」

このリストは国木田独歩と有島武郎が韓国の近代文学の成立に深くかかわっていたことを如実に物語っている。ただし、独歩と武郎に対する韓国文壇の関心がまったく違っていた。例えば、独歩からは書簡体形式と枠形式、一人称観察者視点形式など、それまで韓国文学には存在しなかった新しい叙述形式を手に入れることによって韓国社会とそこに生きる人々の現実を書き映すことができた。一方武郎からは、近代的自我に目覚めた女性の破滅を描いた『或る女』をはじめ自己の本然の要求に生きようとする人間と環境との相克を描いた『カインの末裔』、芸術と実生活の相克を描いた『生まれ出づる悩み』などの作品を通じて韓国近代文学史上はじめて人生問題に苦闘する過渡期の青年の内面世界を描き上げることができた。つまり、韓国文学は独歩と武郎を通じて近代文学という本舞台へ立つことが出来たのである。

2. 研究の目的

そこで本研究では、韓国近代文学に影響を

及ぼした日本近代文学者の中でも、とりわけ国木田独歩と有島武郎に注目し、李光洙をはじめ金東仁や田榮澤、廉想渉といった韓国の近代文学者が独歩と武郎の何を、そしてそれをどのように受容したのかを解明することによって、韓国近代文学に及ぼした日本近代文学の影響が独歩から有島へ受けつがれていった事実を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、韓国近代文学に及ぼした日本近代文学の影響関係が独歩から武郎へと受け継がれていった事実を明らかにするために(1)先行研究及び関連資料を米国、韓国、日本で調査・収集し、研究者と意見交換を行った。(2)収集した文献や先行研究を①「新しい文学と国木田独歩」②「国木田独歩から有島武郎へ」③「近代文学の成立と日本文学、そして有島武郎」の3つのテーマに基づいて分析を行った。

4. 研究成果

これらの分析によって、次の点を明らかにすることができた。

(1) 新しい文学の見本としての国木田独歩

独歩の小説は生前あまり読まれなかった。それが、亡くなる1908年前後から評判になり、文壇の注目を浴びるようになったが、丁度その頃から韓国の留学生が次々と日本に渡ってきた。身辺雑記をやたらに長い文章で淡々と描く自然主義作家たち、あるいは自我の問題を追求していた夏目漱石などの活動が目立つなかで、簡潔な文体と豊富な題材、それに一人称小説の開祖とも言われるほど一人称小説をたくさん書いていた独歩の作品は、それを取り入れるかいないかは別として、新しい文学を目指して勉強中であった習作期の青少年たちの関心を引く要素を持っていた。

① 李光洙の啓蒙文学と独歩の少年もの

韓国における最初の独歩読者は李光洙である。彼は日本語学校時代(1905~06)、明治学院中等部時代(1907~1910)、そして早稲田大学時代(1915~1917)と、通産8年間日本に留学していた。独歩との出会いは明治学院に在学中の時であるが、ちょうどその頃から独歩の作品が中学校の国語教科書に掲載され始め、日本の中学生は無論、韓国や中国から来日していた留学生の間も親しく読まれた。ただし、李光洙が明治学院に通い始めた1907年から1910年の間の独歩は自然主義文学の先駆者として名声がきわめて高かった時期である。

しかし、李光洙が関心を示し、読んでいたと思われる独歩の作品は、自然主義の代表作と目された晩年の「窮死」「竹の木戸」「二

老人」ではなく、「少年の悲哀」「春の鳥」「馬上の友」「画の悲しみ」など初期と中期に多く描かれた少年ものである。親もとを離れて異国の地で一人寂しく暮らしていた多感な14、5才の留学生たちは、独歩の少年物がくり広げる作品世界に自分たちの境遇を重ね合わせ、あたかもそれを追体験するかのようによろこびながら読んでいたのであろう。とりわけ、なかば孤児のような境遇で留学生活を送っていた李光洙にとっては、独歩の少年ものは自分の少年時代と重ね合うものであったに間違いない。だからこそ後年創作の筆を執るようになった時、独歩の少年ものから多くのヒントを得て、自己の幼少時代を追憶する作品を書いていたのである。

しかし、後に李光洙が回想しているように、彼自身は当時一世を風靡していた自然主義に関心を示し、島崎藤村の『破戒』や田山花袋の『蒲団』なども読んでいた。しかしながら、自然主義への関心が深まることはなく、李光洙の関心は次第にアンチ自然主義、たとえば木下尚江や夏目漱石、トルストイ、バイロンなどの作品に注がれていった。彼が、いわゆるアンチ自然主義作品を読むようになった背景には留学先輩である洪命憲の影響が指摘されている。確かに、李光洙自身も留学中に読んだほとんどの書物は洪命憲の手から渡されたものだとか、あるいは洪命憲が勧めてくれたものだと告白しているため、読書に関しては洪命憲の影響を受けていたことは間違いない。果たしてそれだけなのだろうか。私は、李光洙が花袋や藤村など日本の自然主義作家の作品にあまり関心を示さなかったのは、当時の日本の文壇における自然主義文学の方向性にその原因があると思う。なぜなら、1907年に田山花袋の『蒲団』が発表されて以来、日本の文壇では社会や他人と自分を比べて相対的に自分を見つめるというよりも、作家自身の私生活（特に性欲）を露骨に、そして無批判・無反省に描く告白形式の文学が主流となっていたからである。しかし、当時の李光洙といえば、日本に渡って日本と韓国との間の文明の格差に圧倒されながらも、そのような差を生んだ背景を知ろうという自覚から民族意識に目覚め、「文筆家として民族の発展に寄与する道」を歩み始めていた。つまり、民族意識を高く掲げて文学活動を行おうとしていた李光洙にとって田山花袋流の自然主義文学は違和感があり、相容れなかったのである。だが、独歩の作品は違っていた。自然主義の先駆者として文壇の脚光を浴びているにもかかわらず、その作品世界にはカーライルやワーズワース、ツルゲーネフら外国文学を愛読し、キリスト教の洗礼を受けることによって生み出された「シンセリティー」や「驚異」といった独自の宗教観と自然観、文学観が流れていた。日本の自

然主義文学に共感できずトルストイやバイロンなどを読んでいた李光洙が独歩文学に強く惹かれていったことは容易に想像がつくのである。

しかし、李光洙は啓蒙主義を高く掲げて文学活動を行う、いわゆる自他ともに認める啓蒙文学者だった。それゆえ独歩文学を受容する際にも、社会的弱者の平凡な人生を悠久なる自然の中に捉えようとする独歩文学の本質を理解するのではなく、啓蒙的な視点で捉えようとするきらいがあった。例えば、「からゆきさん」として朝鮮に流れていく下層社会の女とその女を気遣う少年との出会いと別れを、悠久なる自然と対比させ、やるせない悲哀を描き出した「少年の悲哀」に影響されて執筆した同名小説「少年の悲哀」は、少年から大人へと成長する無垢なる少年の精神世界を描きつつも、李光洙自身の強い啓蒙意識が災いして古い結婚制度を批判する作品になってしまったのである。また、女に背かれた男の切ない気持ちを一人称で告白した「おとづれ」に影響されて執筆した「幼き友へ」は、自由な男女交際と結婚の実践こそが朝鮮社会を封建的な因習から救い出すことができるという朝鮮社会に近代化を迫る作品になってしまっている。これは啓蒙文学者としての李光洙の限界であり、悲劇といわざるを得ない。従って、独歩文学の本質を理解し、さらにそれを越える作品が現われるためには、李光洙の啓蒙文学を徹底的に否定する『創造』派の出現を待たねばならなかった。

②『創造』派と独歩の一人称小説

1919年2月、日本に留学中の金東仁（川端画学校）、朱耀翰（第一高等学校）、田榮澤（青山学院大学）、金煥（東京帝国大学）ら仲間4人が文学同人雑誌『創造』を創刊したのを皮切りに、『廢墟』（1920）、『薔薇村』（1921）、『白潮』（1922）、『金星』（1923）といった同人誌が相次ぎ創刊された。まさに文壇を挙げての同人誌ブームが巻き起こったが、この時期、韓国近代文学史を塗り替える画期的な文学雑誌が次々と発刊された要因として、李光洙など前代の文学への反発が指摘できる。

『創造』が創刊された1919年は、韓国が日本に併合されて10年目を迎える節目の年である。周知のごとく、韓国を併合した日本は水も漏らさぬといわれた憲兵警察政治を実施し、民衆の日常生活にまで軍事支配の網の目を張るなど、過酷な植民地政策を展開した。人々の生活は急変し、中でも1910年から1918年にかけて行われた土地調査事業は民衆の暮らしを一層悪化させた。土地調査事業は、建前は近代的土地制度による土地所有権の確立がその目的であったが、実際は土地収奪を強化するためであった。調査が終了した1918年頃には韓国農民の7割が小作農に

転落し、土地を奪われた農民たちは住み慣れた故郷を捨てて満州やシベリア、日本などへと流浪の旅に出た。それすらできない人たちは妻や子どもを売って生計を立てたりするなど、貧困が社会的な問題と化し、人々の鬱憤は絶頂に達していた。つまり、併合後わずか10年で韓国社会を取り巻く環境は急変し、人々は精神的にも物質的にも追い詰められていったのである。

ところが、李光洙をはじめとする当時の文壇はこのような現実には目を向けず、相も変わらず社会教化を目的とした啓蒙文学を描いていた。そうした文壇に対して苛立ちを覚えていた金東仁ら留学生たちは理想の世界を追求するよりも、韓国民族が置かれた現実を直視し、それを作品に反映する文学を行うべきであると次のように主張した。

私たちが示そうとしたものは、決して新旧道徳や自由恋愛を主張するというような消極的なものではなく、人生の問題と煩悶であった。(中略)

このように我々は小説の題材をくだらない朝鮮社会の風俗改良に求めるのではなく、「人生」という問題と生きていく苦悩を描いてみようとした。勸善懲惡から朝鮮社会の問題提示へ — さらに一転して朝鮮社会の教化へ — このような道程を経た朝鮮小説はついに人生問題の提示という本舞台に立ったのである。(『朝鮮近代小説考』1929)

つまり、金東仁たちが目指した新しい文学とは人生をありのままに描く「人生問題の提示」の文学、すなわちリアリズムに基づいた文学なのであった。しかしながら、当時日本に留学していた金東仁たちは新しい文学活動をはじめたいという意欲に溢れていたものの、中等部を卒業したばかりの彼らには文学的知識も足りなく、自分たちの力で新しい文学を打ち立てることはできなかった。

そこで彼らは日頃読んでいた日本文学や日本語に訳された西洋文学の中に見本となるものを捜し求めた。そして出会ったのが、自分たちの周りにいるごくありふれた人たちを取り上げ、彼らの人生や現実を決して理想化するのではなく、ありのままに描く独歩の小説であった。中でも同人たちの関心を強く引いたのは、「少年の悲哀」「春の鳥」「女難」「運命論者」「おとづれ」など、<私>や<僕>、<自分>という一人称の語り手が登場して自分の過去を回想したり、あるいは自分の見たことや聞いたこと、体験したことを語ったりする一人称小説である。

一人称小説は、近代の始まる18世紀頃からドイツを中心に登場し始め、19世紀初頭には西欧近代小説を代表する様式となってい

る。韓国では、1910年代半ば頃から登場し始め、1920年代に入ってから書簡体小説や枠小説、一人称観察者叙述形式、告白小説など様々な一人称小説が執筆されるようになったが、その先駆的な作品のほとんどが独歩の影響を受けている。例えば、韓国初の書簡体小説「幼き友へ」(李光洙、1917)と一人称観察者視点形式「白痴か天才か」(田榮澤、1919)、枠形式「ペタラギ」(金東仁、1921)はいずれも独歩の「おとづれ」(1897)と「春の鳥」(1904)と「女難」(1903)の影響を受けているが、そのうち「白痴か天才か」と「ペタラギ」が『創造』に掲載されている。同じ雑誌に独歩の影響を受けた作品が二つも掲載されているということにも驚くが、それが単なる偶然の一致ではないところに、『創造』派の危機意識を指摘せずにはいられないのである。

『創造』派によって始められたこの新しい形式は、社会問題への関心が高まる1920年代に植民地下の韓国社会の現実とそこに生きる人たちの人生をありのままに描くことができる多くの作者に取り入れられた。その結果、一人称形式は1920年代を代表する叙述形式となったが、その先駆的な作品が独歩の「春の鳥」と「女難」の影響を受けた「白痴か天才か」と「ペタラギ」である。

後に金東仁は「ペタラギ」に触れながら、「この『ペタラギ』こそ余にとって最初の短編小説(形にせよ量にせよ)であると同時に、多分朝鮮にとっても朝鮮文字と朝鮮の言葉で書かれた最初の短編小説であろう」と自負してやまなかった。この金東仁の自負は、枠形式という新しい叙述様式を韓国近代文学史上はじめて成功させたという自信にほかならない。しかし、それよりもまして指摘したいのは、金東仁はこの新しい形式を得ることによって、韓国社会とそこに生きるごくありふれた人たちの切実な人生問題を形象化することができたことだ。「ペタラギ」の主人公がすべてを失って離別の舟歌を歌いながら海上をさすらうその姿に、人の力ではどうにもならない切実な人生問題が提示されているという事実を私達は見逃すわけには行かない。この人生問題の提示こそ金東仁たちが求めてやまなかった新しい文学にほかならないのである。

(2) 国木田独歩から有島武郎へ

ところが、金東仁たちの作品は早速仲間から完成度が落ちると指摘された。例えば、朱耀翰は前代の文学に反発して新しい文学運動を始めた同人たちが、未だに近代文学のあるべき姿を描いていないことを危惧し、『『あるがまま』に描く写実主義運動、これは朝鮮の芸術家なら一度は通過せねばならぬ重要な道の一つではないか』と指摘されています。安っぽい

ロマンチズムから免れない限り、心に迫る真の文芸は生まれないと私は思うのです」(「長江の入り口で」1920)と、一刻も早く、安っぽいロマンチズムから抜け出して「あるがままに描く写実主義」の文学、すなわちリアリズム文学を目指すべきだと主張した。

しかし、朱耀翰の忠告もむなしく、当時の『創造』の同人たちにはリアリズムの文学理論を深く突き詰め、それを展開させる力がなかった。その端的な証拠が『創造』6月号に掲載された金東仁の「ペタラギ」である。前述の如く、金東仁は「女難」「運命論者」など独歩の一連の粹小説を手掛かりとして、それまで韓国社会では全く顧みなかった社会の底辺を生きる漁師とその家族の切実な人生問題を形象化することによって韓国文学の近代化を図った作品である。しかし、それだけであった。つまり、「ペタラギ」には「人生」はあっても、人生への深い懊悩から生ずる不安や煩悶、虚無感が描かれていなかったのである。

金東仁が、それに気付いたのは奇しくも「ペタラギ」発表直後の1921年8月から10月にかけて『開闢』に連載された廉想渉の処女作「標本室の青蛙」を目の当たりにしてからである。『創造』の仲間とともに、李光洙の啓蒙文学を否定して韓国文学の進むべき方向を模索していた金東仁は、「ペタラギ」によってついにそれが提示できたと自負した。まさにその時、「標本室の青蛙」が発表されたのである。新人と思っていた廉想渉が韓国文壇では一度も試みられたことのない「過渡期の青年の感じる不安と煩悶」を描き上げたのである。その衝撃が如何に大きかったのか、次のような金東仁の告白から察することができる。

1922年末(1921年8月から10月までの誤り：引用者)、廉想渉が『開闢』に「標本室の青蛙」という小説を発表した。「この人が小説を書いた」私はこういう気持ちでこの作品を読んだ。しかし、連載の第一回を読んだ時はすでに、筆者は胸のうちに大きな不安を覚えた。強敵が現われたことを直感した。李人植の独り舞台を経て李光洙の独り舞台、その後2、3年はまた筆者の独り舞台にほかならぬものであった。(中略)過渡期の青年の感じる不安と恐怖の煩悶―「標本室の青蛙」に現われているのはそれであった。筆者は、廉想渉の出現に大いに不安を感じながらも、この新しいハムレットの出現に痛快の念を禁じえなかった。(「朝鮮近代小説考」1929)

金東仁が「標本室の青蛙」にこれほどの驚異と不安を覚えたのは、廉想渉の作品が心酔

していた白樺派の小説、とりわけ有島武郎の作品に肉薄する出来だったからである。

留学以来、日本文学を愛読していた金東仁は、ほかの誰よりも大正期の日本文学を理解しているつもりであった。しかし、「標本室の青蛙」を読んだ金東仁は、廉想渉こそ白樺派をはじめとする日本の近代文学の本質を理解していた唯一の作家であると認めずにはいられなかったのであろう。なぜなら、「標本室の青蛙」には「人生問題」を提示だけではなく、「人生問題」に苦闘する「過渡期の青年の不安と煩悶」が描かれていたからである。そのような廉想渉の出現に「大いに不安を感じ」たのは、金東仁だけではなかった。

留学生が押し寄せた1910年代の日本文壇は、私生活を赤裸々に暴露する自然主義に反発した夏目漱石や森鷗外が活躍し、耽美派、白樺派など新しい世代の作家が次々と登場する時期である。しかし、来日したばかりの日本語のおぼつかない幼い留学生にとって自我の実現を追い求めたり、官能や享楽、耽美な世界をひたすら追求したり、あるいは樂觀的な理想主義を唱えたりする当時の大正文学は決して読みやすいものではなかった。それゆえ、留学生たちは中学校の国語教科書によく登場し、何よりも「画の悲しみ」「馬上の友」「少年の悲哀」「春の鳥」といった少年時代を多く取り上げていた独歩の作品を好んで読んだ。

しかし、中学校を卒業し、高校や大学に進学した留学生たちの関心は次第に独歩から離れ、島崎藤村など自然主義作家をはじめ夏目漱石、有島武郎、谷崎潤一郎など大正時代の日本文学やトルストイ、ツルゲーネフ、モーパッサンなど日本語に訳された外国文学へと移っていった。中でも、留学生たちの関心を強く引き付けた作家は白樺派の有島武郎であった。

白樺派は、1910年、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、里見弴、柳宗悦ら学習院出身者が創刊した同人誌『白樺』を中心に活動を行っていた大正文学を代表する文学グループである。大正デモクラシーの自由な空気を背景に人道主義・理想主義を主張しつつ、後期印象派など西洋美術を紹介する白樺派の活動は同時代の日本の若い作家だけではなく、韓国や中国の若き文学者たちにも多大な影響を及ぼした。中でも、有島武郎の文学と思想は1910年代に来日した多くの留学生に計り知れない影響を及ぼしている。

周知の如く、有島武郎はホイットマンやイブセン、トルストイなど西洋文学をモデルに日本の近代リアリズム文学の中の最高峰の一つと言われる『或る女』を生み出している。『或る女』だけではない。処女作から晩年の作品に至るまで有島武郎のほとんどの作品は西洋文学の影響の下に執筆されている。そ

れゆえ有島武郎は日本近代文学史上「最も西欧的知性の作家」と言われたが、この西洋的性格こそが、逆に韓国や中国から来日した留学生たちに広く読まれる契機となった。

とりわけ、韓国では1920年代に文壇をリードしていた金東仁や田榮澤、廉想渉、朴鐘和などが強い影響を受けている。彼らは有島武郎の「死と其前後」(金東仁、1920)と「小さき者へ」(朴錫胤、1921)を翻訳したり、自らの作品中に武郎の「生まれ出づる悩み」(廉想渉「暗夜」1922)や「宣言」(金東仁「心浅き者よ」1919)について言及したり、あるいは北海道農場解放運動に共鳴したりするなど、その傾倒ぶりはもはや独歩を越えている。つまり、金東仁たちは『宣言』(1917)、『生まれ出づる悩み』(1918)、『カインの末裔』(1917)、『死と其前後』(1917)など武郎の小説を広く読んでいるだけではなく、「個性の自覚」「自我の確立」を唱える武郎の思想や芸術は無論、農場解放運動などにも深い関心を示し、その影響を受けていたのである。まさに文壇を挙げての有島武郎ブームが巻き起こったが、前述の如く、大正期の日本文学のレベルは非常に高く、とりわけ白樺派の小説は習作期の外国の若き文学者にとっては決して読みやすいものではなかった。

有島武郎の作品をモデルにして処女作「弱き者の哀しみ」(1919)を執筆した金東仁は、発表当初、「4000年の歴史を持つ朝鮮に新文学が生まれた」と豪語したが、この処女作は金東仁自身が高く評価するほどのレベルではなかった。処女作だけではない。『宣言』の影響が指摘されている「心の薄き者よ」(1919)も、近代小説とは程遠い内容である。

ところが、廉想渉は違っていた。処女作「標本室の青蛙」から「暗夜」(1922)「除夜」(1922)に至る一連の作品を通じて、廉想渉は金東仁とその仲間が描こうとしても描ききれなかった自我の実現を求めて苦闘する様々な登場人物の内面を描き見せたのである。しかも、それらは単なる日本文学の模倣ではなく、憧れていた有島武郎の小説に肉薄する内容であった。そんな廉想渉の登場に、金東仁は「強敵が現われた」と警戒しつつも、「痛快の念を禁じえなかった」と告白している。なぜなら、1910年代から近代文学のあるべき姿を模索していた韓国文壇がついにその「本舞台」に離陸できたからである。それを成し遂げたのは金東仁より2年遅れて登場した廉想渉なのであった。

(3) 韓国近代文学の成立と廉想渉、そして有島武郎

李光洙の啓蒙文学への拒否から新しい文学運動を展開していた金東仁とその仲間は、留学以来愛読していた独歩の作品から書簡

体形式と枠組形式、一人称観察者視点形式といった韓国文学には存在しなかった新しい叙述形式を手に入れることによって、植民地下の韓国社会の現実と人生をありのままに描くことに成功した。これで韓国文学は啓蒙文学から脱皮して近代文学という表舞台へ進出することができたと同人们は大いに満足していた。

ところが、金東仁たちが独歩の一人称小説に満足している間に、廉想渉は当時文壇の中心的な存在となりつつあった白樺派の文学、中でも有島武郎の作品を手がかりとして、近代的自我に目覚めた過渡期の青年たちの内面世界を描き見せたのである。独歩を通じて近代文学の方向性を示し得ながらも、肝心なことを描いていないことに気づかされた金東仁たちは、一斉に有島武郎を読み始めた。その結果、韓国では文壇を挙げての有島武郎ブームが巻き起こったのであるが、前述の如く、武郎の作品は決して読みやすいものではない。にもかかわらず、彼の作品や思想、芸術が韓国の近代文学者の間に幅広く受け入れられたということは、すでに当時、韓国小説の近代的性格と枠が出来上がっていたことを意味する。その環境作りに独歩と武郎が深くかかわっていたという事実を、本研究によって明らかにすることが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 丁貴連「『新女性』の愛と性、そして『恋愛至上主義』—有島武郎『石にひしがれた雑草』と廉想渉『除夜』を手がかりとして」、宇都宮大学開国文学研究会『外国文学』62号、2013年3月、1-22頁

② 丁貴連「韓国近代文学と日本、そして有島武郎—国木田独歩を手がかりとして」、宇都宮大学国際学部附属『多文化公共圏センター年報』、4号、2012年3月、153-163頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丁貴連 (Jeong Gwiryun)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：803128591